やめよの御いけんと、うやまつて申。

○丸屋お花相合笠（はやり歌ざいもん）

はやまつて申奉るの、是はなにはにさくや此花の、かほりもいつしかに、ちりて歸らぬ梅田ばし、わたりかねたる戀のやみ、思のほむらさき付し、木やの清兵とうきなのみ、立や月日のけふと暮、むかし語りぞあはれなる、思はふかきしら見川、そこの心を皆打あけて、かはすせいしにあらゆる神を、かくるちやうちん二つの紋に、いのる印もあらしふく、みねの白雪うちとけ語、枕の數のかさなれば、内のふらちもあこぎが浦の、あみのをぶねの人めを忍び、引にひかれぬうき世のぎりに、くらのかねいれ明暮の紋日やくそく付とゞけ、身請のかねのおときれて、主の手前もふしゆびとなりて、なんと正月はつ買よろづ、あてがちん〳〵ちがふて、思わくちがひのおてき樣、じつどうもならずのほとゝぎす、あけてしあんを霜月や、つまりしはすもおゝみそか、いかな丸やも角びしを立て、せがめばかさだかに、内ゑきこゑりやしよじのわけ、あしのまろやに秋風や、しうもあいそをつき弓の、矢竹に思ふ清兵衞、ちからなく〳〵鶯の、こゑにつれ立朝ぼらけ、あくる二日はあいせん樣へ、參る女郎衆のすがたをゑらみ、あまたの中によしあしの、うはきぞろへのだて小袖、もつたいらしいよねもあり、つむりにめだつ二つぐし、あたいやらしいふうもあり、有が中にもかなしきは、丸屋おはなでとゞめたり、いとしと思ふきよ樣は、不首尾なしなのあてごとや、つらい中にもかくしぶみ、あひた見たさは日にまさり、やるせなぎさのすてを船、こがれ〳〵て物思ふ、くるしきむねの中の町や、おもてがうしに身をよせて、見ればかなしやふるあめのはげしきに、世にしよんぼりと立すがた、花は身もよもあらりやうものか、そつとぬきあしちよこちよこばしり、袖にすがりてなきゐたり、清兵衞涙をおしとゞめ、こよひきたのがこんじやうの、いとまご





ひぞやさらばといふて、腰のかたなに手をかけければ、花はあはてゝおしとゞめ、わしもかねてのかくごの戀よ、しなば一所と手に手を取て、身をしるあめにさす笠の、しづくも我もおなじ身と、友にきへ行くのべの露さ。

○淀屋浮名川（はやり歌ざいもん）

うやまつて申奉るの、さればなにはのよしあしを、かたるもつらしよどやばし、我とくづるゝあだなみの、よるべさだめぬうきふしに、まよふ心のこひのやみ、てらすやよみせ大臣と、よもに其名をたつ五郎、思ひそめたる戀衣、さればくるはのいばらきや、あづまといへる太夫職、姿よしのの花よりも、もみぢよりも、戀しき人は見たい物と、いかな夜も日もあげや入、袖つまそろへてはんなりと、宵の内より早咲初て、花のふり袖われやとめ袖よ、見せはかく袖いまだて袖は、いつもくるわのちよん〳〵〳〵〳〵女郎衆、ちよん〳〵〳〵〳〵女郎衆、ふれさ〳〵袖ふれさ、ちよつと三筋のしやみせんに、ひかれのぼるや戀の山、ふもとに見えしあげせんは、なんのへちまの皮袋、淀屋の藏にうめけども、内の手代が引しめて、ゐけんするがのふじの雪、つもるおもひや若旦那、とかく耳には入相の、かねもろともに内を出、浮世小路のはやかごで、いそぎくるはにいきづゑの、おとが聞えし吉田屋に、君をあげやの色遊び、あこぎが浦にひくあみか、たびかさなれば内の首尾、聞にかなしくお爲ぢやに、しばしかよはせ玉ふなと、いへば辰五郎きもひがみ、きやくにいやならあづまをば、こよひの内にやつきり〳〵な請出し、汝が夢をさまさんと、ふいとざしきを辰五郎の、袖にあづまはナッすがりつき、是まあたんきな何ごとぞいの、きけば内かたふ首尾なげなに、身請所へ行事かいの、お爲思ふていわんしたこと、諸事はわたしにめんじてやいの、かんにさんせと手をあはせければ、そばにありけるもの共に、先一ばんに權十郎、人をのせ

やの七郎兵衛、つゝくみやむら七右衛門、いしやのげんせき立かけて、もりし藥のごふく町、たい山城や又兵衛、旦那まだるしもどかしゝ、樣の御判でかねからば、はしのよいこのしたでも川の中でも、二千兩や三千兩はちやのこぢやと、後のなんぎも水車、淀のかはせの手形がね、つゐにあづまを請出し、情の袖を引ゆみや、やわたの町にかこひ置、いもせつきせぬ長枕、それに淀屋はうんめいか、但し若げか酒ゆゑか、かみをかすむるとが有て、花の色にはをちる梅の、殘る五人は千日に、はぢをさらせし物語、戀はくせもの、惡性の酒きげん、たん〳〵たんきはそんきのはじめぞと、うやまつて申。

○金屋金五郎（うき名のさいもん）

歌で浮名を奉るのほゝ、がくの小三が戀男、それはかなやの金五郎、そも此小三金五郎が、中をたとへていおふなら、アノ堀つめの二ッ井戸、どちらをみてもふかければ、客のさはりとおやかたが、せいてふつふつ金五郎を、あたりほとりへよせつけぬ、それでなをしもおもひ草、はじめの程は町がたの、客とつれ立たいことなりて、をりにふれては入こみけるが、後にやおやかた其手もくわず、今はせんかた涙の雨や、風のふく夜も雪ふるよはも、かぶと頭巾でかほ打かくし、笠屋町筋千度もいてはまた、もどりつ行つ立とまり、坂田藤十郎、杉山かんざ、扨はたま川半太夫などが、こゐをにせつゝあいづでしらしや、小三ははつと心にこたへ、客のすきまにかうしへ出て、見ればかなしやふる雪の其中に、世にしよんぼりと立すがた、見るに身も世もあられふものか、申々と小ごゐに成て、一つ二つとさゝやく内に、おくへかりましよ、にかいへかろと、杉がよふ聲耳つきぬけば、せひも涙をたもとにつゝみ、後にま一どちよとあいましよと、いふて入月あか月のかね、扨はしばゐの一ばん太鼓、きいてもどらぬ夜半とても、情ないかな金五郎は、せつなき戀に取まじへ、五



かんのふゆの夜ざむにあてられしゆゑやらん、枕もさらにあがりえず、いしやも藥をもらざると、人のうはさできく計、あい見る事もなら坂や、此手がしはのふたおもひ、かなしきときのかみたゝきとて、いせや八わたやおたがのやしろ、扨はなにはの十五社神へ、はだし參のぐわんこめて、つまの金五郎いのちをば、せめてはわしが此里の、ねんのあくまでいかせてたべと、いのるしるしもナッあらそんじやう、しわす廿日其朝霜と、つゐにはかなくきへ行路で、おやこ一門みなあつまりて、なまいだ〳〵〳〵、なまいだとうやまつて。

○上、八百屋お七（うたざいもん）（△京ふうを（色ざかもり）にあり。）

うやまつて申奉るのほゝ、ふゐによるねの秋のしか、妻ゆゑ身をばこがすなる、五人女三の筆、色も替りて江戸櫻、さかりの花をちらしたる、八百屋の娘お七こそ、戀路のやみのくらがりに、よしなきことをしいだして、御代官所へ申上、すぐに御前に引出す、時に奉行の仰には、年はもいかぬ女子の身で、かゝる大事をしけるぞや、とがの次第を有樣に、申上よと仰遣る、お七なく〳〵申樣、過つる年の大火事に、わらはが家もるゐくわして、旦那寺にてかりずまひ、えんはいなもの、其寺の小姓吉三とみづからが、おやにかくして二世までと、こゆびを切てちをしぼり、きしやうを書いてとりかはし、枕さだめぬ其内に、ふしんじやうじゆ仕、もとの本郷に歸れども、二世とかねたる吉三には、いきてわかれしかなしさの、文のたよりもあらざれば、ねていてしゐんいたするに、又もや家をやくならば、つまの吉三にやす〳〵と、あふてかたらんうれしやと、思ひさだめて夕ぐれに、一わのわらに火をつゝみ、ほゝりあげたる計にて、やくるしさいは候はじ、もはやかさねて致すまじ、只御じひに此度は、たすけ玉はれ殿樣と、あとなき詞さりとては、おさなきもののいひわけと、かみ一人をはじめとし、なは取町人、心なきやつこの角内角

助が、ひげも涙をながしけり、重て奉行の仰には、ふびんなれどもせひもなし、法にまかせおこなへと、火ざいの帳にとめられて、日本橋にてお七をばさらしける、只世のあはれは是なりと、うやまつて申。

○下、戀のひざくら歌ざいもん

うやまつて申奉るのほゝ、さればちくるゐ、つばさまで、おやこのわかれかなしめば、いはんや人のおやとして、なげくことこそ道理也、八百屋お七のおやたちは、けふぞきはまるさいごびと、きくにかなしくきも玉しひも、せきくる涙もろともに、さいご所へかけ來り、其まゝお七にいだきつき、なくより外のことぞなき、母は涙の下よりも、さ程吉三にそいたくば、母にひそかにしらせなば、何とぞ和尚に申請、めでたふ祝儀をとゝのへて、なじみをかさねそはせふに、かゝるうきめを見すること、子にてはあらでかたきかや、若木の花をさきに立、跡に殘りて何とせん、ともにきへよとなきければ、お七涙の下よりも、なげかせ玉ふもことはりや、死のゐんむりやうと何ごとも、思ひあきらめ玉ひつゝ、なき跡とふてたび玉へ、おや子は一世ときゝければ、是がこの世の見おさめと、わかれををしむあはれさよ、かかる所へ吉三郎、ぐんじゆの中をおしわけてすがりつけば、コハいかに、サテなつかしの吉三樣、命は秋のしもとかや、かくはあらねど妻ゆゑに、命をすつるならひあり、さいごの御目にかゝる事、つきせぬゐんとうれしやな、我をふびんとおぼすなら、出家となつてなきあとを、とふて玉はれ吉三樣、此世のゐんはうすくとも、ながき來世でそひまする、もはやうき世のかぎりぢや、爰へござんせ我つまと、たがひに手をば取かはし、此うつくしきお姿に、何の命がおしからん、かなしきこともさいごをも、つまにまよふてわすれたる、女心ぞいとほしき、時刻みつれば、それ〳〵と、おや子吉三を引わけて、お七ひとりに柴をつみ、ほのほさかんにもへあがる、あはれなるかなお七こそ、十六歳を一ごとし、無常のけぶり是ぞ此、ぼんなふすなはちそくぼだい、まよひもはれて吉三郎、すぐに姿をすみぞめの、かねにつれだつもろゐ佛、誠にはかなき戀路ぞと、うやまつてもうす。

○彦惣近江八景歌ざいもん

見わたせば、何し近江の浦山は、八つのびけいの名所かな、よはほのゞ〳〵とあさぎりに、立旅人はいせ參り、ふかきおもひは乘かけ馬に、くつわのおとはちりりん〳〵、ちりりん〳〵、りん〳〵りゝしきまごの歌、茶しやくの竹の一ふしを、所望々々とのぞまれて、とうざい〳〵、こゑは出ずとうたふてみましよ、あしげ馬、追て浮世がなろか、えて袂のかげの馬、くつわのおとはちりりん〳〵、りん〳〵りゝしきまごの歌、あはづの町の朝あけの、しづがわらやの戸をひらき、見世をおろせばいへ〳〵に、ヨイヤサつつたるものは何々、はながみわらんず口んぶりぞ〳〵、わらのざうりにすげの笠、近江の笠はなりがよふてきよて、しめをがながしみじかしよわたりに、ましばかたげてしづのをが、家を出れば跡よりも、つまの女ぼうはおくり出す、はや出させ玉ふかや、けふはあらしもはげしきに、あきないもののねをつめて、かをふといはゞやすくとも、そこをいとはで賣玉ひ、早うもどりてゆる〳〵と、やすみ玉へやこちのとゝ、やいの〳〵と申けり、彦惣すこしはなよ竹の、ふしぎなことはけさのにが、きつうおもふてもちにくい、柴がなま木か但しまた、けさの出立のにごり酒、たらぬかげんで有そふな、酒のかんして今壹つ、かさねゞ〳〵の出立酒、あこぎが浦のあみだ佛、おがむ〳〵と申けり、つたへきゝにしもろこしの、かの七けんといふは、琴詩酒をたのしめり、しづ山がつのわれ〳〵は、ことひく事も歌も詩も、しらでくらせど今一つ、茶碗酒をば引ことは、じねんたねんに覺たり、とかく浮世は何よりも、色と酒とでかためたり、ほんに誠にわすれたり、色とい

ふのできがついた、おれがるすには女房共、わかい男をよせ太鼓、うてばひびくぞ何事も、我はしらねど人がいふ、秋風ならばどう成と、そこも談合の有そ海、山田やばせのわたし船、のりかへたくば（ハテ）まゝよ、三くだりかいて半くだり、さらり〳〵といとまの狀、ふるすにかへるいへづとに、ほかをかせげと申しけり、女房大にはらをたち、いつものくせといひながら、となり近所をはぢ玉へ、いつマァるすに人をよせ、ふぎがありとは誰がいふぞ、それはこちからいふ詞、女房たらして内を出て、柴はうらゐで色ぐるひ、大津の町の色里へ、かよひ局の女郎と、たがいちがひのお手枕、ほんにおかしいことじや迄、よし人がわらふてアノ里を柴屋町じやと名に立る、そなたのかやる女郎の名をば、つま木と申げな、それがうそにてはら立ば、三くだり半は扨おきぬ、九くだりも十くだりも、それはこちらからかいてやる、はやうでていにや、すつきりもどりやんな、内へはよせぬとわめきける、さすがの彦惣あきれはて、いかに入むこなればとて、女房にさられ其うへに、十くだり半のいとま狀、男が取て出ること、神武天皇このかた、つゐにきいたることはなし、まよふたりまよふたり、思ひ切つたるゑんのつな、さらばといふて出ければ、女房やがてすがり付、（シテ）とゝはどうでもいにやるかや、（ヲ、テヤ）何のいなそぞや、うそじやわいのこらへてと、袖にすがり付、おもふあまりの小いさかい、きげん直して出玉へ、諸事あきないはあさゑびす、笑て彦惣は出にけり、そこで彦惣が立行ふりは、あたまちやせん、ふともとゆひで、はでないしやうのはぎをばからげ、しやんとみじかい袖なし羽おり、戀となさけとふたつになふた、手づなおびしてましばをかたげ、彦惣はどこへしばをりうりに〳〵、ぢんやじやかうはもたねども、にほふてくるはたきもの、柴めせ〳〵、彦惣が柴は、つま木に花を折そへて、まだもござんすはおぎはぎすゝき、





たばねながらもになふたふりは、コレ柴賣と見ゆるか、（ガヽデヤ）おもにおろしてちと又やすめ、肩かよ（ヨカ）ロくゞりにくいかたをくゞり、くゞり〳〵ておもしろや、ゆん手はえいざん、めてはせた、むかふは草津まへはぜゝ、こゝは所も名にきゝし、あはづのせいらんこれとかや。

○嵐形見送り（五人兄弟やつし）

あらし涙の下よりも、野にも山にもほしきは子供兄弟也、しんはなきよりと、せはにいふもことわりぞや、我此度都にのぼり、しよ見物のめをおどろかさんと、思ひさだめ候へども、おもきやまふにうきしづみ、ながらえんことかたし、ひとりははゝ、ひとりは子、女はごせのとも千鳥、我もしはてなばなげきをやめ、はゝのくやみをいさめてたべ、扨喜代三郎はわかければ、ゆくとし月のおぼつかなし、かれらがことをも、ひとへにたのみ申ぞかし、いかに喜代三、とてものことにふる里なにはへ書置し、またはかたみのしな〴〵をも、おくり申さん、もつともと、れうし硯をとりよせて、せうじをひらき筆をとり、硯の海にする墨も、涙ぞおちてこきうすき、筆のあゆみぞあはれなる、一筆かいてともすれば、松がことのみかゝれたり、扨其次のすさみには、母、新左衛門の御事、扨其外はいづれもおなじぶんしやうにて、とりわき此身のうれしさは、はゝうへにあひ奉り、ちゝきやうやうの諸げいのみち、大龍寺中のつちにかばねはうづむとも、名をばうづまじ、なむあみだぶつ、五つや三つの時よりも、三十餘年の春秋の、ねがひむなしくなれごろも、ゆるし玉へとふでをとめ、元祿十四年霜月のかほみせごろのそらさむき、夜やしらぶるとつげわたる、嵐三右衛門判と書とゞめ、筆をすてゝぞなきいたる、なをしもかたみぞあはれなる、はだの守は母方へ、わきざし小づかは勘右殿、かづらかみしも四郎五郎へ、ぶたいいしやうふたながれ、勘四郎喜代三にとらするなり、びんのかみは女

共、夜半のさゝめにたきしめし、とめ木のかをりうすくとも、むじやうのけぶりなびきあふ、二世のちぎりとおもふべし、はぶたい二ひき、もみ二ひき、わたのしろまでそへられ、坂田殿より玉はりしを、くるわにのこすおもひぐさ、きやくにせかれてしのびあふ、おんをあだにてぼうしんの、念佛せよとの形見なり、手づま人形まひあふぎ、大夫のかぶろがほしがりし、思ひ出せし折ふしは、此人形も袖しぼる、露のそこにもふくあらし、なきがらとふてえさすべし、かの文藏の物語、やよやまたなき身のふりと、めいどにまします親あらし、つたへおかれしさゞゐがら、五郎までにとらせてくれ、まき繪のめん箱、名左衞門、つぎじやみせんは中川の、與惣に思はぬ中なれば、かたみとなげくなげづきん、尺八つゞみふえたいこ、はやしかたのたれ〳〵へ、松は涙にくれるとも、だんじり打てはやしたて、形見とおもひ見せてくれと、くどきなげきておはしける。

△嵐喜代三親三左衞門死去、元祿十四年霜月。

○傾國諸天づくし甲賀三郎やつし

そも〳〵此人間せかいの色にまよひ、しやくせんをするやからあり、四方に戀のよねをならべ、四つにわかつてうきふしの、づつうをはらすひざのうへ、あさに夕ににぎはしき、新町と名づけしは、まづ東方にはあぶらみせ、白銀山かとうたがはれ、南方にはゑちご町、へのじなりにならばれたり、西方には九軒町、わうごん位をたて玉ふ、北方にはあはざ町、すいなるまぶの小宿あり、さておうようなる大臣には、是きげんとる太鼓もち、とりたいもらひたいと、しやうごんなる身のたづき、うきやつらきは二日ゑひ、只何事も世の中は、心にまかせかね次第、雲のうへまでのぼりつめ、ゆづりの家も色でうしなひ、あじきなき世と墨染の、またみきさせずのぼせつ、ふつゝあらば、おのれが身より出せる身の、おちめたのみしかわるやりばなし、ひさらびゝしきやく衆でも、





とれぬとみると其むごさ、よもに浮名はいとわねど、むくひのほどもおそろしく、あゝ人めもはぢもゑりにつく、色にまよはすしかけもの、あるひはかのこりんずるりもやう、今おりとう物身にまとふ、これみなすがたのたねなれや、かうしよくじんな人心、いとゞすゞしさいさぎよく、さつ〳〵とあめのふる夜はしめやかに、戀路のまくらうちとけて、風をひいたも、うつりじやとおんせいわざとせか〳〵と、ごしきをくまどるねやのうち、玉のうてなも下に見ゆ、たはけつくすも一すゐの、うつるつまどのよるのあめ、むしやうめつたにしこなしがほも、にくてらし、ふりかけみればとりみだし、はやあさごみのあかつきも、わかれに心せはしなく、こんがうかたしにわらざうり、むねとゞろかすうちのしゆび、只身のつねのむふんべつ、しきかいのほうづがない、すへて梅をば天神、ことには松のぼんでん、太夫しよく、あらゆる女郎にいたるまでぐちもんまいの心にて、などかはこゝにすまるべき、たとひ一たんのゑんにひかれ、わるじやれどんなるきやくに行とも、手まりののぼるごとくにて、ひィふゥみよろづに心をつくるよね、矢よりも早くうけだされ、もとの心を引かへし、おくさまがたの心にいたれと、きせるをもつて、はたとうつ、牀とつてはだとはだ、せめかけ〳〵笑ひける。

○浮男揃おとこぞろへやつし

すがたぞ色所なる。とはしらずして女郎衆、すあしきよげに立出て、あげや〳〵に出らるゝ、よねたち見るやうつけ立、たいこひきよせむりおさへ、まづさきそめし花山さま、つぼみがちなるふうぞくに、ちがほ櫻の色そへて、ふかま橘二つもん、けふの御つとめのおきやくには、たれ、さん候、あの客、げに松葉のしげ樣とて、あにごはあれどとをりもの、かまはぬことは戀がもと、御きりやうはすぐれねど、北濱中のねづよにて、はたもしらるゝつめもする、

あたりがようて手取もの、牀でのたつしや殊にはまた、ごしゆをまゐるもこゝちよし、お心いれはたいきにて、あゝおくゆかしとほめにけり、太夫げに誠、太夫にはそのくらゐのみおゝくして、まなこのみかへしいたづらに、まじりあがつてしやんとして、松にそなわるうまれつき、そしる方なきよねなれど、つとめながらも身のくせに、よくがふかふてにくてらし、扨其頃はみちとせの、こきくれなゐのもやうぞめ、むすびとゞめしあらをのこ、ぬれてみだれしみだれがみ、とのごだいたる枕あと、手をまはさるゝきやくがある、いたいめしたが右のもゝ、さきにつとむる客はいかに、さればいな、あのきやくはつしまの國のおさぶらい、とよらの源様御城下にては、かくれなきびなんのほまれ、心はうつじん、しよはけはもちろん、もん日をかねしやさしおと、太夫かたり玉へば、大臣はばちなげすてゝながめやる、げに此君は聞なれし、當世の情しり、牀でもやぼはふらぬよし、すいなよねとはきゝしかど、ちといおふならざしきつき、ずんとしたまでいやらしく、そらしてよねはたかゝらず、またひくかりし客までも、あさからぬこそ情なれ、戀は二品ありながら、むくつけな事は、いふよりさつとのみかけさはげよと、ふりみふらずみさだめなき、身はうきふしのぞめき町、よねをさかなにうつけ立、ほす酒のかん、すがひの肴、こなたはあゆずし、あなたは玉子に、扨又すこしひきゐ有、いかやいせゑびいかだに切、小のおのこの大口に、ざしきは酒にひたしける、さもやいかにつとめとて、くだまくたいこきのどくや、これもかぐらがなきゆゑに、△たいこもちかぐらのうはさ。小松のしげるすみよしの、たいこはならぬとけうじける、ありあふざしきどよめきて、はや夕ぐれの山のはも、ひときりやうづつつかめとて、十めんつくるどれ衆共、小づらのあかひおとこかな、爰へおこしと色ふかす、とくしたひもにしよじとめて、はでなもやうをみつがさね、二つさしぐししどもなく、身は戀みちてはきがほに、身ぶりやさしくうつくしく、すがほきめよくつやてりて、男見るめのふたがはに、あいきやうあつてなづみあり、此世まれなるうまれつき、とふにおよばぬわが戀の、みよしの様と詞をかけ、あとをいはぬもはづかしや、いろといろとのおもしろや、三日つゞけどくどからず、屋敷三箇所うちつけて、とかふの事はいわでゆく、水のあをみに袖ぬらし、くらもたからもいづれさて、こゝぞまよひのながれまち。

○色茶屋月見今様拍木やつし

げにもこよひは、秋もひがんのそらくらく、二口やの茶屋にきやくもなし、大臣仰けるやうは、いかにかか衆きゝ玉へ、さればもあん小りんがいひしにも、あすはねてこよひはきやくとのみて見んいやなはしらずくぜつもやせんと、△もあん小りんの狂歌。口ずんばひの言のはも、こどろひ客にあめをねぶらすならひかや、かのむりやりしかけときこえしも、此いや風をこかしてに、さんご一歩のかねのいろ、かいまわらねば、こすいとひかるかげを見て、すいはうたてをひやしきり、きりのと白銀すまさねば、せつき〳〵のかきだしに、大事のかねをかけあつめ、もはやいやとはおもへども、えんにひかれてわれ〳〵も、もとの心のかはらねば、よそのわかい衆もちやくちやと、詞みだれてさわぎ行、風がきかする尺八は、ふいてとほりしこだまかな、あちのこちのといろ〳〵に、ききやうがく風呂あふぎ風呂、ちよや小しゆんもみだれあひ、涙もらふておのづから、むねはさわげと座なりしぞ、こゑをくらべてなげぶしの、むしんいをかとひとよわく、くされふつ〳〵きほ〳〵す、そうならァ八まんあぶらむし、口きく客のむらがりて、みなみのかたへとびゆけば、よえうらやまし、我もまたゐんつのあらば、色里に立かへるべきながめかな、かか衆ふたせに〳〵、次第をとむるもものすごく、ぴ

ん〳〵となるはしやみのおと、色にひかれてとびあるくは、やぼになりそでいとほしや、あほうをはなげとうたがはれ、いとゞむかしのおかしきに、おぼへてをつてよぶこめろ、せめてわが名を夕月の、神のちかひにくもりなく、わが家にかへるしゆびもがな、なむ清水のくわんせおん、ひがんたがはせ玉はずば、二度こきやうへかへしてたべ、ねびくわんをんりきと、けんゑつはいて御きげん有、心のうちこそおかしけれ。

○山衆うそ説（くせき）もりひさ
（ちさくの五せきやつし）

そも〳〵山衆の心いれ、客のせなかにのりのこま、うはぼれほんにうけん事、此世があのよそのまゝに、とりもなをさずたぶらかす、としひねたるがかねだか也、かばかりすごきお山ども、つくりしうそがあらはれて、心のしんく身をせむる、三百六十六にちを手くださま〳〵かりましよと、つとめのならひあだぼれや、そらなきなみだながしては、せんかたなさにふみをやる、もんびのつとめあてちがひ、ひとりねをする牀のうち、そもや此きやく一人と、三十ばん神くるしめて、いのりたてたるかひもなく、十月もあはで子をはらみ、あまたの客にみかぎられ、そしらせ玉ふ御うはさ、くやめどかひのあらばこそ、ほむらがもへてはらがたつ、扨其次は戀衣、わがつまならぬ人のつま、ないぎのうらみねたみのかほ、しゆつけをおとせしつとめのばち、てだいをこかした旦那のそねみ、おもひまはせばおそろしく、くにはならねど、かたて風きる大臣などは、くるわ〳〵とはかたごまほど、まはりまはらばおのづから、かひもありそのはま千鳥、これは又うはきの山、ほりのやしうにうちこんで、つとめそこ〳〵そは〳〵と、なにをするやらわけもなや、ちすじの心中またしても、戀路のやみにかきくれて、しのびねに行しの竹の、きみにすがりてなくばかり、つらしやにくやめんどうな、そも又何のゐんぐわにて、大じのきやく





のめをくらまし、しなれぬおやをしなしたり、せつきとなれば心せき、行くる人にむしんいひ、五百夕ほどのしやくせんにこひつめられ、あまたのかけとり、夜に三ど、ひに三度、はやうすませとさいそくす、かさねてうはきをやめません、せいもんびやくらいつとめつき、はておやきやうだいにばちあたらん、ちへあるとてたのみにならず、うたがひなしにくだんせと、むりやうのうそをつきませて、またふづくられうつじんは、此せいもんを誠とおもひ、五百夕ぽんとはずみしは、うれしかりける次第也。

○傾國十二段（四季の段やつし）

かいてふみしてそこはかと、硯のうみのかぎりなく、かざりしくらゐたづぬるに、まづ一ばんに太夫しよく、むめをやつしてうつくしや、しやう天じんのやさすがた、みな見もどりしあざやかさ、はでなさしぐしはでなふう、ふさのみくしのたかしまだ、なかばむすびのぬきぞろへ、あだなふてにこやかで、戀風にあくしどけなさ、すそひろがりにつまたかく、一きはまつのふうぞくと、あげやあそびの色くわげん、どこもかもよき其ふぜい、これぞまよひの戀のふち、うじやううしよくのおすがたと、かゑりもうしてながめやる、こなたにそふて秋の山、しげみのしかのかこひぎみ、ゑにしむすぶのあいらしさ、一座のさはい情ふく、かぜでてうしやかゑぬらん、心をすゝぐ色ざけは、いもせしらがのはゆるまで、ちぎりたへせずいくよかも、ふたつまくらにのべがみを、しんきといひしねすがたに、なをよろづよのなごりにて、よねがこよひのしかけにて、ふみまちわびてかよふべし、かみなでつけてさらばゑと、いとま申せば大じんは、なごりをしくもあすのよと、いろがみだるゝさくら茶や、よほとゝぎすやどりけん、またのあふせとさゝやくは、見どころおほき客衆かな、扨とをりすじあはざ町、ゑちごののべ野よしはらや、ほのかに見ゆる小てんじん、かうし〳〵

も色そへて、なさけあらはにまぶぐるひ、うたをあいづにあふてくらし、つゞりさしてはなんのかの、いとゞましくるものおもひ、しゆびもそしりもしのぶまで、おやかたのきもわざくれて、おなじはちすにいたらんと、もらさぬ中のたのしみは、さながら戀のしほどきや、月女郎と影またおなじ品とかや、扨たそがれの身じまひに、ぬきもとゆひのかみかをる、ゑくぼにうそをうばはれて、うかれ男のしのびぢに、もの日のせはをたすかりて、たいこかぎりのつとめだけ、のちの世とてもいとはぬは、とんと此身をかの人に、ふうじめすごきかみかけて、二世とかはらぬたのしみも、うつなおとこのしらんこと、十とせがうちのうさつゝさ、すいた男とすへこめて、しなでひとつのこけのむすまで、かはらぬちよをまつぞいな、さてこそわけのよしはらは、かはらぬ色のこい〳〵に、くらきつぼねのうきすまひ、たつやよみせのうちばかり、かほはくふんにぬり出る、つぼねほのかにはぎかほる、のどかなきやくもありやなし、いつもたへせずゑりかはる、おなじ色とてけいせいと、なにのみつれてまぶもあり、たいこうて〳〵ちわこめて、ばん〳〵せいなぞめき人、よるのうちにもめせきがつきる、さへあるにやりばなし、濱のまさごのかず〳〵と、かのいづつ屋のとこいりを、こゝにうつしていろ〳〵の、おなじながれのほりゑには、つきせぬ戀のくらやもあり、さかゆく色のひさしきは、新町みなみでとゞめたり。

○心中道行 呂州色名よせ

わが命日はゆきとまる、ところなりけりあだし世を、しばしもなげくおろかさよ、ついにゆく道とはかねてきゝしかど、きのふけふともこよひとも、おもはざりつるしでの山、みねどもいとゞ心うく、ちよのためしとうゑおきし、めでたきみよの松しげみ、今のうきみのながめには、澤のはちすはありがたき、扨もさがなきうき世をも、こよひかぎりとおもふにぞ、





よろづ心のひかされて、八ゑのしほぢになくかりも、こゑなつかしくしたはるゝ、これもまよひのそのひとつ、ふたりつれだつみつせ川、ふかくぞたのむのりのみち、これよりあなたのともとては、けちみやくひとつに花をりて、なまァみだ、なまみだ、なむあみだ、たすけ玉へとくりすつる、たもとのつゆのかずとりも、かぎりある身ぞあはれなる、人ひとさかり花に風、げにやくわんらくきわまりて、あいしやうおほきよの中や、みとせいぜんのさつきやみ、てんじんざかのかへるさに、小さんか、るいか、たれやらが、ほたるをとつてあそびなば、みちのひそくになるらんと、ゑいをすゝむるくさのべは、つぎ〳〵まつしやかずおほく、世にもときめきたりけるが、けふのこよひのさいごには、たれとふものもあらしふく、のぢのくさばのした露と、きえなん事の口をしや、これが此世のみはてかと、たがひにかほをみあはせて、しのび涙はあめやさめ、ぬれにぞぬれしもろたもと、ひくてあまたの身にしとき、むりなくせつにしかられて、よたゞなげきしわが袖は、あしたほす日もありつるが、あさ日をまたぬかげろふに、命くらぶるあはれさよ、爰はめいどへァ行みちなれば、筆にやことかく、すゞりすみやもたず、もしもみなさまァおとをりならば、おや子三人うき世のゆめを、見はてましたといふてたもれ、ゑいこの、うき世思ひあきらめわがつまと、すがりついたるちからぐさ、をぎのわか葉はつまべにを、させるがごとくうつくしと、思ひながらもいろかへて、ふぢとこふぢとふたしなに、てふがかよへばねたむらん、めだつばかりにつのぐめば、やよねたむかとおそろしく、しめてねしよは有ながら、かはすまくらの合よもすがら、しかもきこえぬさゝめごと、まだつきなくにゆびをれば、わかれもちかし八ッのかね、ァ、うらめしと思ひぐさ、しのぶ草なる戀草も、いづれか秋にあはで、さてはつべきのみか世の中や、小しゆん小かんに霜が

れて、しばしなき身と成けるも、またくるはるにめをいだす、かれてふたゝびかへらぬは、きしのひたいのねなしぐさ、われ〳〵おや子草かなと、うちしほれゆく、みちはひつじのあゆみひまもなく、あだしがのべにぞつきにける。

○三勝自然居士道行のやつし

こひのしがらみもつれつよれつ、いとでつないだ身でもなや、つないだ絲で、絲でつないだ身でもなや、わがつまなるをつまとせで、いやな所へ行くならば、名のみのこせよ戀おとこ、とかくしねとのおしへかと、なに中村のうらざしき、なかばもろともさんかつは、あないはしりつうらみちより、しづかとばかり人やきく、そろり〳〵としのび出、千日寺と心ざし、おびしどけなく立出て、こゝよかしこよ、かほかにむけて、やみはあやなし夕より、ほしのかずよむあだしのの、つゆふみわけてあゆめども、いついつよりもあしおもく、ひろひかねたるうたてさよ、夜のふけぬるをたのしみに、道はかどらずあくせきと、おとはしばいにはしりつき、すかしてみればくろいぬが、ねずにほゆるはおそろしや、あなたこなたへはしり行、ごだうせぬ身は我ながら、しぬるとさらにおもはれず、あけなばさぞとおもへども、とてもなき身はきさんじと、心一つであきらめて、ゆけばうらみもあらき座の、やぐらだいこをながめつつ、役者々々、あけなばふたりがみのうへ、あらし岩井でたれ〳〵、杉山あづまと、西川あらしと、見てきたやうにしぐまん、こゝもかしこもかいどりこづま、ぞんぶりぞ〳〵、はまぶねぞんぶりぞ〳〵と、うつたる水のあは雪きへて、うき世に名をばながさん、我もなにはのおんなまひ、所によりてかさやとも、かはるものよなわれはまた、やまと口口といわれしに、かゝるうき身となりはてゝ、國々しよ〳〵にあだ名をば、アノよばれんもくちをしや、おもへばこれもかねづまり、人やわらはん人やみん、わけてはづかし中村屋、ゆけばちそうのたねをまき、かたびら一つやることか、あげくのはてにきのどくを、かけてなかばは露霜と、きへてかへらぬあだし世を、くやむはぐちとあゆみゆく、こゝぞはかしよのおちあひ口、夜なきする子のこゑきこへ、もはや夜あけの鳥もなく、なげくまいぞといさめしが、みるにつけきくにつけ、これが見おさめかかなしやな、またみることもあるまいに、せめてはかほをみせ玉へ、としごろ日比たくさんに、なさけがましきこともなく、いはで今まで戀衣、きぬのかとめてうつくしく、こゑおもしろきそがのまひ、よね乗みよとてな、すけなりすがれば、とらがなふりそで、さいこの〳〵さ、やんれ、ふり出見たしゑ、やんれ、其まひが見おさめか、ねざめのとこのおきわかれ、今見るやうにおもはるゝ、きゆるをしらでさゝめごと、むかしがたりとなりにけり、はやじんじやうのかねのこゑ、はやくさいごをいそがんと、ひやのうしろのたかそとば、こゝぞ一れんたくしやうと、つまとつまとをくゝりあひ、かたみとなれやのこす筆、からすのなくねほの〴〵と、夜あけのしもときへし身は、いづれなみだのたねぞかし。

○かるた請狀けいせいやつし

もとよりきらいのあらばこそ、くわい中より時ならぬ、てくだしかけしかるた一めんとり出し、しらふだと名付、たかなしにこそきりあげけれ、すいほうどもまでこけ狀の事、一つ此かうと申むすめ、ながれのしちをおかせそめ、うんすんぐわんねんまゑがうにむし、にぎりにあざもちやつきだし女郎、にくづしなどもさはりなく、せにも丸がち十ばんまいて、銀子百匁はたしかに手どりの、身はかちぐりよ、おやはくさりのまんをとるとも、よひのあいだは一座のほかへ、ひとつかみでもせにはちらさじ、ひらひこたちにとつてやりても、そゑこにでられ、おゝと其まゝ、つけめさせもが露ほども、とらるゝにじよ

いなく、てらをもうたずかたひざたてゝ、まはすせにをば一もんも、手にもたせ申まじ、第一には見つぐるひ、うきなおいてうにいれじやうね、するすむし有てつけめ、そまつにいたすにおいては、きのままながらのむしにおろされ、または九けんのぶたにせられて、かほに火をたきひあせながして、ひねれど〳〵馬のぞろして、ちんばつけめのうんきちらにも、のこらずはらひ申べし、まん一此こうよことなり、まけてはにげてはしり井の、みづに身をすてまけばらたて、つかみな事をいふたりとも、五したはまけじ、いづかた迄も、うけてが出てさばきがみ、けなし四ぐるま、ぞろ上馬、一九二十にいたるまで、きはめのほかは、いぢむちいわせぬさだめなり、もしまたふかきよりのうち、九まいながらがいきもので、あざもそはりてあるならば、あたい千ばん一ばんなりとも、それはうちてのとくぶんたるべし、もしたれ人ぞよみのばで、おか様だちの手をにぎり、手まめにせぐるあくしよぶね、おしてわるじやれするならば、一代かるたのおざしきへ、でる事かまひ玉ふべし、總じてはるの其内は、いやなりともよみうちならひ、かるたにがんをさしならひ、ちらまきなし手まきならひ、ねぶたくともいねぶらず、うちとむなくともよる〳〵の、よなべにうたせ申べし、あはせしよもどり、しよてがうに、まけをおしませ申まじ、手みそくいぞん、くらもくゐぞん、申ぶん候まじ、其外かるたのよしあしにつき、後日の爲のかくじん奉公、まけ狀のおもふき、くだんのごとしと、せにさし計をなげいだす。

○色酒三部經（大替我やつし）

これは扨置、うはきなるかなうつじんは、けいこくもんに入しかば、九けんのあげやにもうせんしかせ、おもてむきになほりいふやうは、さいはいなんぴんが、九軒のかうしのうちにてつくさん事、ひとへに九こんの酒もりとおぼゆるなり、いかにしやくとり、よねたちも、すこしさゆをばのますべし、それがしがさいかくに、女郎の三ぶきやうを、あら〳〵とひてきかせ申さん、ヤアけもんしゆの人々も、なりをしづめて聞玉へ、それけいせい一代のやりくりはむづかし、ありがたきはみだよりも、太夫天神のくらゐ、三世のちぎりしゆつせの身うけは、酒きゆうゐんらんのもとひなり、きやくにあらざるときんば、女ぼうれんの五字につゞめり、いにつくときはなむあみだぶつで、ねござにあたゝまる、しゆびといつぱ、ふだんのいみやうわけのてん〳〵にのぶるやうな、わろはまの字をかんがへて、くれがたにおふちやくす、ぐちなるも、さにいたつては、口上にほうまいす、一歩をさゝぐる其時は、大じんよせんもこゝにあり、ゆびをきりもゝをつき、きしやうかく事ぶんめうなり、どうらく大臣の御しやくにいはく、しゆぎやうとさんじたいみなたいさんをもつてさけとせり、おしゐはみなないそんのしやうこなれば、本らいむふんべつ、おやじうなんぼくにゐんきよすべし、しからばありたけゐんつをあつめ、心のまゝにせん事は、きよごんさらになく、今でもあの字をやるべし、かまへてあいそをつかされな、はうぐ〳〵京でもぜの字をつくり、大じんとよばれて、はの字をやる、ほれたよねには手のじをつくして、ほんもうとげぬといふ事なし、十くわん三百匁、一さいわれらが八まんしよしや、うきやうかけてあいたいといふ時は、ちやうもんのよね立も、ひたいをゐりにおしつゝみ、わらはぬものこそなかりけれ、かのなんぴんと申は、おさなかりける時よりも、しきだうにおこたらず、一心さんらんの月見は、むめうのゐいを出し、くわんらくのまぶのうちには、まゆに八じのしはをよせ、一日ちうやのさはぎは、む二む三の狀にさまよひ、一生ふらんにあそび、ひやうどう大事の事をわすれ、どうでも一天のほとゝぎすは、むさし野のそこになき、にうちうけんもんのうぐひすは、げこ上ごのきゞに

さへづり、しよ客むしやうにたゞやる時は、せんしやうめつぽうのかねをつかひ、しやうめつめつゐの秋の月は、なゝつ八つにちらつく、ばんたんにふんべつし、かくのごとく有ものを、たゞ大ざけは御むようと、およぶもおよばざりけるも、みな〳〵いけんを申ける。

此外前々よりひろめ申候、一色里なづみ草一冊、一色里びんが鳥一冊、一色里色すごもり一冊。

六藝いづれか劣ならん、中にもたしなみ持べきは音曲の道なり、今此一冊は、當流の一曲中にも、おもしろきをあつめ、ふし章悉改、あづさにちりばめ、御ひろう申候も、御慰のため歟。

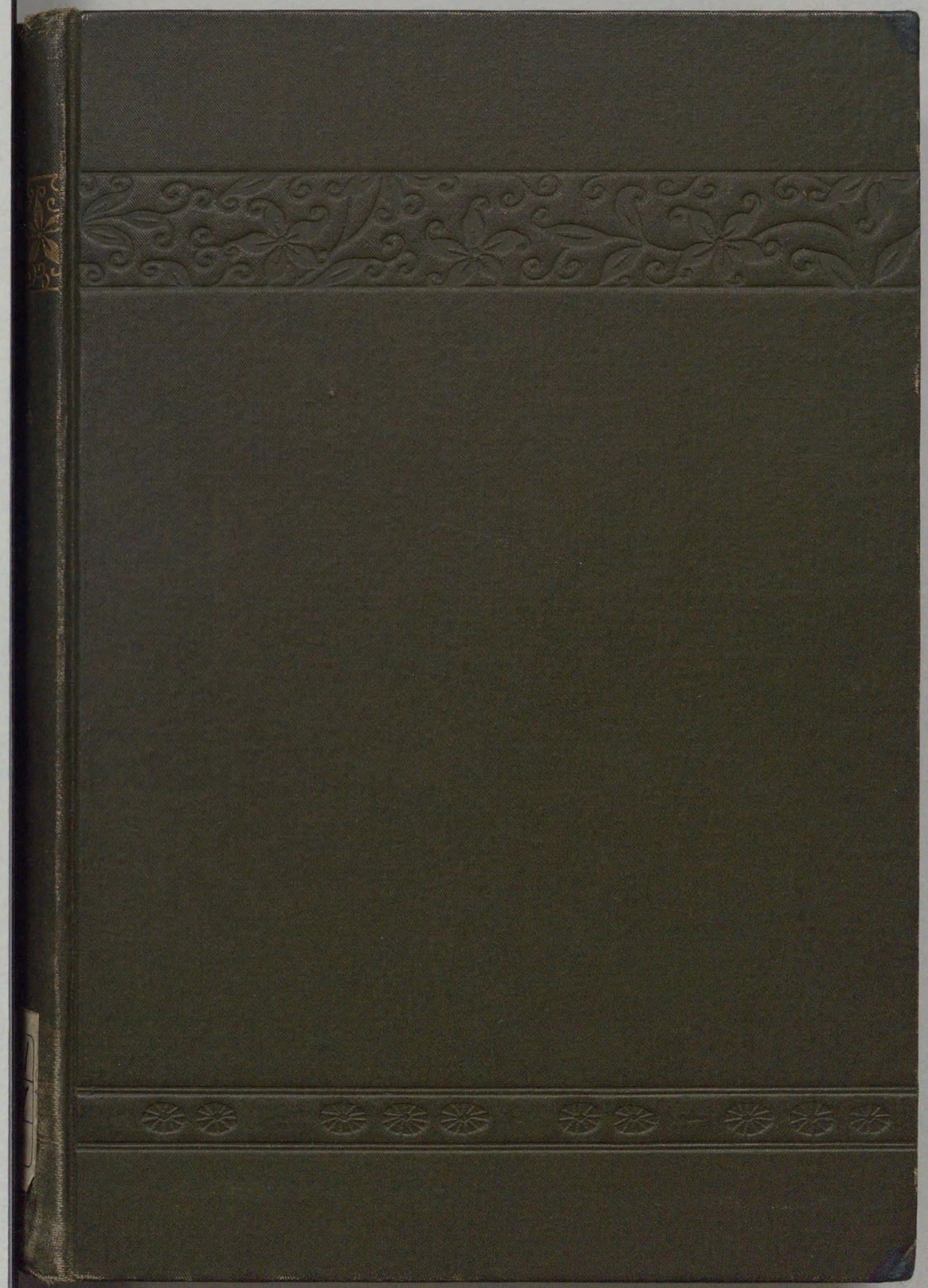
時にはんしやうの難波

大坂心齋橋南へ四丁目
正本屋九左衛門版

◎此書年號ハノセアレドモ寶永享保ノコロノモノナルベシ、元祿十四年ノコト見エタレバサノミフルキモノニテハナシ、

色里新かれうびん終



大正五年四月二十日印刷
大正五年四月廿五日發行
（鼠璞十種第一）
非賣品
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
國書刊行會代表者
編輯兼發行者　早川純三郎
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷者　檜山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　友文社印刷所
東京市京橋區新榮町五丁目三番地
發行所　國書刊行會

《不許複製》